

広島へのさまざまな旅

大江健三郎

//

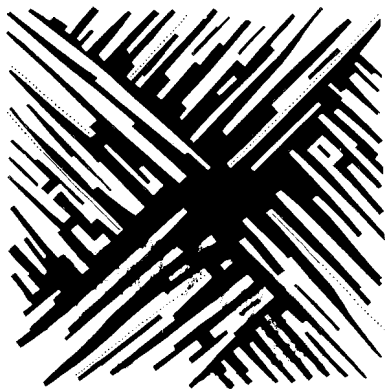
★ このテキストは、著作権あるいは翻訳権使用の承認をえて発行されているものです。無断で複写・転載することはできません。落丁・乱丁本は、おとりかえいたします。購入された書店にお申しつけください。

|                                       |                               |                                       |               |                                   |                                                                |
|---------------------------------------|-------------------------------|---------------------------------------|---------------|-----------------------------------|----------------------------------------------------------------|
| 昭和五七年一月二〇日 発行<br>集団読書テキスト（B42） 定価一五〇円 | 著 者 名 広島へのさまざまな旅<br>大 江 健 三 郎 | 編 者 全国SLA集団読書テキスト<br>委員会<br>本巻担当 石田民生 | カ ッ ト 杉 浦 範 茂 | 本文印刷所 暁美術印刷株式会社<br>製 本 所 本間製本株式会社 | 発 行 所 全国学校図書館協議会<br>東京都文京区春日二丁目二番七号<br>振替（東京）四一五二三四電話（814）四三二七 |
|---------------------------------------|-------------------------------|---------------------------------------|---------------|-----------------------------------|----------------------------------------------------------------|

ISBN4-7933-8042-5

# 広島へのさまざまな旅

大江 健三郎



集団読書テキスト B42

全国学校図書館協議会



大江健三郎

昭和一〇年（一九三五年）愛媛県喜多郡大瀬村（現在内子町）に生まれる。太平洋戦争の始まった年（昭和一六年）に国民学校入学。九歳の時、父と祖母を失う。翌年、敗戦を迎え、昭和二二年、最初の新制中学一年生として大瀬中学校に入学した。その年の五月には日本国憲法が施行され、このことが以後の筆者の思想の中心となったといわれている。昭和二六年内子高校から松山東高校に転校し、昭和二九年東京大学文科二類に入学する。村から地方都市へ、そして首都東京へという青年時代を過ごした。

作家としての出発は昭和三二年「死者の奢り」で、翌年「飼育」により芥川賞を受け戦後を代表する作家となった。代表的作品には長編小説に『万延元年のフットボール』、『洪水はわが魂に及び』等があり、短編小説『鳥』は現代の孤独を追求するものとして高く評価されている。評論には『同時代としての戦後』、『小説の方法』などがあり、文学者としての反核運動にも積極的に参加している。



## 広島<sup>ひろしま</sup>へのさまざまな旅<sup>たび</sup>

一九六四年暮<sup>くれ</sup>、僕は<sup>はく</sup>このノート<sup>(1)</sup>を書きはじめて以来の、広島へのもっとも短い旅をした。僕は広島で、数時間をすごしたにすぎなかった。しかし、広島への僕のかずかずの旅がすべてそうであったように、僕は、人間の悲惨<sup>ひきさん</sup>と威厳<sup>いげん</sup>について切実な反省を強<sup>つよ</sup>いられないではない体験をした。僕にとつて広島へのさまざまな旅はすべて一貫<sup>いっかん</sup>して、そのような旅であった。僕はこのノートを、そうした旅のあとの僕自身の反省のために、まず、書いてきたのであった。

広島についてすぐ、僕は重藤原爆病院<sup>しげとうげんばくびん</sup>院長<sup>(2)</sup>から、被爆<sup>ひばく</sup>したひとりの青年が、白血病で死んだという、ごく最近の記録を聞いた。広島の外では、われわれは広島 of 具体的な悲惨について忘れていること

ができる。率直に言えば原爆後二十年、いまやそれはとくに困難でない。しかし広島ではつねに現実の問題としてこのような悲惨がつづいてるのであり、広島の悲惨のあまりにもあからさまな核<sup>(3)</sup>を支えているのが、原爆病院である。重藤院長は、どのように暗くに、がい心で、この若い死者を見おくれられたことであつたか。しかも、これはなお連続してゆくはずの悲惨の河のなかばの数しれぬ水死者たちのひとりの死なのである。

青年は四歳<sup>(4)</sup>の夏、被爆したのであった。われわれは原爆が広島をみまつた日に傷ついた、数知れない子供たちの写真を見てきた。『ひろしまの河<sup>(4)</sup>』をつくる広島の母親たちのひとりである小西信子さんは、それらの傷ついた子供たちを腐<sup>(5)</sup>らん地蔵と呼んだが、実際あのように数多くの激<sup>(6)</sup>しく傷ついた子供たちの写真を、われわれの歴史もたびたびは可能としないだろう。あれらの奇妙<sup>(7)</sup>に静かな表情をたたえた子供たち、かれらの大半は、写真にとられて数日のうちにすべて死に絶えた。そして、やつとのことで生きながらえたひとりの子供が、ハイ・ティーンに成長したある日、白血病におかされている自分を見出したのであった。青年は、かれの二十歳を原爆病院のベッドでむかえた。

すでにたびたび、僕はその例をあげたが、白血病を治療する医師は、初期の段階において、まず一応、白血病のすさまじい増加をくい止め、いわば病気の《夏休み<sup>(7)</sup>》をまねきよせることができる。

原爆病院の医者たちの努力は、はじめ数カ月にすぎなかった、この《夏休み》を、二十年間の暗い苦闘のはてに、二年間にまでひきのぼした。それを数十年間にまでひきのぼすことができた時、われわれ人類は、白血病を克服したと誇ることができるのである。しかし、いまなお、白血病、この血液のがんは圧倒的に人類より優勢である。二年間の《夏休み》のあと、青年は死とふたたびめぐりあわねばならず、その時、死は決してかれをとり逃すことがない。もし、ペシミスティクな心の持ち主が、この《夏休み》を一種の執行猶予の時間と呼んでも、とくにあやまりはないであろう。しかし、青年は、かれの二年間を猶予の時とは見なさなかった。かれは敢然として、人間らしく生活し、社会的存在たることを希望した。原爆病院の医師たちは、青年のために、かれの病歴を秘して、就職口をさがした。この医師たちは、詐欺をおこなったのではない。もし、そうとわかれれば、誰が白血病の青年を雇いいれよう？ 医師たちは小つばけな欺まんにびくびくする、無能な清潔派でなかっただけのことである。青年は、ある印刷会社に就職した。かれは会社の仲間たちに愛される、善き社員であった。

青年の死のあと、原爆病院をおとずれた、ある高貴の方が、なぜ、この二年間、青年を休養させず、働かせたのか？ と詰問したという。しかし、その高貴の方は、ひとりの青年が、かれの生涯

最後の二年間を真に、生きるためには、ベッドに寝そべっているより、印刷機の音の響く場所<sup>（9）</sup>で、同僚たちと共に働くことを必要としたことを、理解できなかったにすぎない。なぜなら、高貴の方とはついに働くことなく、にせの生涯をおくるべく慣らされた人々のいいだからである<sup>（10）</sup>。

青年は、この二年間を本<sup>（11）</sup>当に生きようとしたのだ。かれは有能な働き手であった。かれはまた職場での社会生活のすべてを十分にまっとうした。かれがどのように真実に生きようとしたか、にせでもなければ、ツクリモノでもない、真の現実生活を生きようとしたかは、青年がひとりの娘と愛しあうようになり、婚約<sup>（12）</sup>したということ、いかにもあきらかであろう。恋人は楽器店につとめていて二十歳だった。

この青年がどのように真の社会生活をおくっていたか、ということをものがたるエピソードがある。ライフ誌<sup>（11）</sup>の記者が、明るい広島という記事を書くべく広島をおとずれたとき、重藤博士はこの青年を紹介し、記者は満足した。青年はそれこそ、明るいヒロシマそのものであったのだろう。

しかし二年たつて、充実した《夏休み》は終わった。青年は執<sup>（12）</sup>ような吐き気になやまされるようになり、再入院し、関節という関節すべての激しい痛み、そして猛烈な吐き気という、白血病の患者の最悪の苦しみの果てに死亡したのであった。

一週間たつて、死んだ青年の婚約者が原爆病院をおとずれた。彼女は、青年を看護した医師たちや看護婦たちにお札をいいにきたのだといった。彼女は楽器店につとめる娘らしく、よくレコード棚やバイオリンの陳列ケースにおいてある、陶製の一对のシカをお土産にした。二十歳の娘は平靜でおだやかなあいさつをのこして去つていったが、翌朝、彼女は睡眠薬による自殺体として、発見されたのであつた。僕は、大きい角をそなえて強そうなシカと、愛らしいめすのシカの、一对の置き物を見せられて、暗然として言葉もなかつた。

くりかえすが死んだ青年が被爆したのはかれが四歳の時だつた。かれは戦争に責任がなかつたばかりか、原爆による、まさに理不尽な不意の襲撃を理解することすらできなかったであろう。その幼児が、二十年後に、みずからの肉体において国家の責任をひきうけたのであつた。たとえ幼児であるにしても、かれがその国家の一員である以上、かれは国家の最悪の選択にまきこまれざるをえないのかもしれない。ひとつの国の国民であるということはそのようにも陰惨なものであるかもしれない。

しかし、自殺した婚約者は、いかにも象徴的な年齢、二十歳で、まさに戦後の子だつた。それでいて、彼女は、みずからの意志において、この被爆した青年の運命に参加し、青年の死後、まさに

彼女が青年にたいしてとりうる全責任をはたしたのである。国家は、青年にたいしてなにほどのこともできなかった。すくなくとも青年の絶望の穴ぼこは、国家全体をそこに充てんしても埋らぬ巨大さだった。しかし、ひとりの純粹に戦後世代の娘が、後追い自殺することですの暗い穴ぼこをみたしたのであった。この二十歳の娘のみずからの意志による選択の壮絶さは、現にこの国家に生きているすべての人間にショックをあたえずにはおかまいだろう。絶望するほかない場所に追いつめられた青年を救済すべく、わかい娘がとつた絶望的選択。

彼女はひとつの価値を逆転したのだ。国家というもののいやらしい欺まんを、その犠牲<sup>犠牲</sup>となつた弱者の姿勢において、しかし、じつは、国家の欺まん、生きのこっている人間の欺まんのすべてに対して、致命的な反撃をくわえ、そして恋人ともども、沈黙したまま、彼女たち独自の威厳にかざられた死の国へ歩みさつたのである。他人どもを、容赦<sup>ゆるし</sup>しない孤独なきびしさの死の国。いったんは彼女の恋人をその幼児期に不意撃ちし、まきぞえにした、国家の影の、もう絶対によろかいできぬ<sup>(13)</sup>圧倒的に個人的な、ふたりだけの死の国。白血病の《夏休み》も勤勉に働いた青年のストイシズム<sup>(14)</sup>も、娘が敢然として婚約者の死後の生活を認めないで自殺した決意も、決して欺まんの国家、欺まんの生者<sup>せいじや</sup>たちをうけつけない、断固たる覚悟によつてよろわれているのである。陶器でつくつた

一組のたくましいシカと愛らしいシカの置き物のまえでわれわれはただむなしく暗然とするほかない。おだやかな優しい思い出を、数かずの人々の心にのこして自殺した二十歳の娘は、ひとりの人間が、原爆症で死ぬ青年にたいしてなしうる最大限のことをしたのだった。自己犠牲などという意味合いはいささかもない。決定的な愛の激しさにおいて。そして、この激越な愛とは、そのまま逆に、われわれ生きのこっている者たちとわれわれの政治に対するすさまじい憎悪に置きかえられることもありえた感情である。しかし、告発せず沈黙して死んだこの二十歳の娘は、われわれに、もつとも寛大な情状酌量をした。われわれには、くみとられるべき情状などありはしないが、二十歳の娘は、おそらくおとなしい威厳をそなえた性格だったので、われわれに憎悪の告発をおこなわなかったのだ。

この恋人たちの死について僕はひとつの推測をする。これはもちろん僕の空想の域をでないが、じつはそのように信じている。すなわち、青年は二年間の《夏休み》を期して就職したとき、自分が全快して、仕事をはじめめるのだと考えていたのではないだろう。かれは、医者たちがどのように誠実なうそをついて、カルテの秘密をまもったにしても、かれは自分が白血病であることを知っていただろうと思うのである。しかもかれは、白血病がふたたびかれを捕獲するまで、地道に働くこ

とをあえて望んだのであろう。

そして、そのような青年と恋愛をはじめ、婚約した娘もまた、その事情を知った上で、そうしたのであろう。そうでなければ、二十四歳と二十歳の婚約はいくらか早すぎるとみなすべきではあるまいか？　かれらは、身近にせまっている死の時をみこして、すみやかに婚約したのであろう。

そして青年にはついに死の時がおとずれ、娘は穏やかに覚悟の死を選んだのであろう。娘は婚約者の死に出会って、悲嘆のあまりに死を決意したのでもなければ、絶望し、死よりほかに選ぶようない場所に追いつめられて自殺したのでもないだろう。彼女はおそらく、白血病の青年を愛しはじめたときから、まぢかの確実な死を眼のまえに見すえていたはずである。娘は青年の運命に参加し、自分自身をそこにまきこんだのであったが、それはこのようにもつとも徹底的なひとつの運命の選択であつたのであろう。

広島上空の氣象報告のために原爆機に先行した観測機の機長であつたイーザリー陸軍少佐が、十二年後、テキサス州で郵便局を二つ襲撃して逮捕されたことはよく知られている。かれは精神錯乱の理由で無罪になつたが、その精神錯乱とは、広島への罪悪感によるものだとも米国復員局の精神病

医が証言した。

イーザリーというアメリカ人の郵便局襲撃に際してすら、陪審員<sup>(15)</sup>たちは、すなわち人類一般は、かれを有罪とみなすことができなかった。かれらはちゅうちよした<sup>(16)</sup>。それは人類一般にとって、広島が、共通の罪悪感の根元であることを示している。

しかし、人類一般は、もつと恐しい罪悪感の赤裸々<sup>せきせき</sup>なあらわれに、出会わなければならないだろう、もし、ここにひとりの凶暴<sup>きようぼう</sup>きわまる殺人犯があらわれて、かれをそのような犯罪にみちびいたものが、広島で被爆したことへの絶望感にもとづくとしたなら。われわれの誰がこの犯罪者を正視する勇気をもつだろう？ われわれが、現実<sup>げんじつ</sup>には、このようにもつとも切実にわれわれの罪悪感の露頭<sup>ろつと</sup>をかむべき犯罪者をもたなかったのは、単にぎょうこうと呼ぶべきであろう。そしてこのぎょうこうは広島<sup>(17)</sup>の、あるいは絶望するほかなかった人々の、おどろくべき克己<sup>こくぎ</sup>心<sup>(18)</sup>によつてのみ、またらされたものであることを肝に銘<sup>めい</sup>ずべきであろう。

あの、白血病で死んだ穏やかな青年が、もし、二年間の《夏休み》を勤勉に働くことのかわりに、一個の犯罪者となつてしまつていたら、と空想してみることは、われわれのぬくぬくとおさまっている心に、鋭いショックをあたえないではない。青年はストイックに働いて日々をおくり、

かれの死につづいてすぐ後追い自殺するほどにもかれに深い印象をうけた恋人を得た。それこそが、まさに異様なほどにも、常識的な状態をこえた、ひとつの稀有<sup>(20)</sup>の達成であつたのだということを忘れてはならない。

この青年とその婚約者とは、かれらがもし狂気や犯罪や道德的なてん落に到<sup>いた</sup>つたとしても、なおかつ人間らしいとしかいいようのない、そういう最も深く、にが<sup>にが</sup>い絶望をまのあたりにした人々である。しかし、かれらは屈伏せず、ストイックに、最後まで威厳とともに生き、沈黙して威厳ある死を選んだのであつた。

原爆を投下したアメリカの軍事責任者たちが、広島市民の自己回復力、あるいはみずからを悲惨のうちに停滞させておかない、自立した人間のれんち心<sup>(21)</sup>とでもいうべきものによりかかつて、原爆の災厄にたか<sup>たか</sup>をくることができたのであることを僕はたびたび考える。しかし、もつと広く、われわれ人類一般が、このように絶望しながらもなお屈伏しない被爆者たちの克己心によりかかつて、自分たちの甘い良心を無傷にたもつことができたのであることも、われわれは忘れてはならないであらうと思う。

もつとも、広島からのうわさに意識して耳を閉ざさない限り、甘い良心はいつまでも無傷ではい

られない。僕は、この旅行のあと、眼と耳にふれた、ふたつのうわさをもここに記録しておかねばならない。そのひとつは一月十九日付読売新聞夕刊のコラムである。《ご迷惑をかけました。私は予定通り死んで行きます。こういう遺書をのこして、広島十九歳の娘が自殺した。十九年前母の胎内で原爆の業火を浴びた娘だが、その母は被爆三年後に死んだ。この娘も原爆症で、幼時から肝臓と目がわるかった。しかも母の死後父は家出し、現在七十五歳の祖母、二十二歳の姉、十六歳の妹のかぼそい女手四人暮しである。三人とも中学を出るとすぐ働きに出ねばならぬ生活状況だが、この娘もせっかくの特別被爆者手帳を持ちながら、ゆつくり入院治療するいとまもなかった。治療面での対策はあっても、安心してじっくり治療を受けさせる生活面での支えがない。被爆者対策のアナだろう。業苦と貧を背負わされた若い命は精も根も尽き果てた感じだが、予定通り死んで行きますの「予定通り」に表現を絶したものがある……》

また筑豊炭田からのうわさ、日本の消費生活繁栄の時代の、政治的かつ社会的なひずみと欠陥の極北である筑豊に、広島から追いたてられるようにして移り住んできた多くの人々がいること、被爆によって家族をうしない、最底辺の職業についた女性たちもまた、そこにふくまれている模様であるということ。ここには、どのように効果的に原水爆被災白書のための全国的な調査が進行して

も、なおかつ、決して名のりでることのない、広島的女性たちの幾人かがひそんでいるはずである。われわれ広島の外の間人は、このようなわきによつて、眼と耳に強い酸をそがれたような覺せいの一瞬をもつにしても、すぐにそこから意識をそらしてしまふ。広島の中においても、被爆者よりほかの人々は、われわれとおなじようであるかもしれない。

ちなみに、広島で白血病の青年が死に、その婚約者が後追ひ自殺したとおなじ時期に、東京でひとつの叙勲がおこなわれていた。勲一等旭日大綬章をうけた米空軍参謀総長カーチス・E・ルメー大將は、広島、長崎への原爆投下作戦に、現地で参画した人物である。この叙勲について政府の責任者はこう語つたとつたえられる。《私も空襲で家を焼かれたが、それはもう二十年も前のこと、戦争中、日本の各都市を爆撃した軍人に、恩しゅうをこえて勲章を授与したつて、大國の國民らしく、おおらかでいいじゃないか》

(24) この鈍感さは、すでに道德的荒廢である。広島の間人の眼でそれを見れば、これはもつとも厚顏無恥な裏切りであろう。われわれは政治家や官僚の倫理感覺について、寛大だ。かれらが汚職でもしないかぎり、ジャーナリズムがこうしたモラルの低下を攻撃することはない。しかしこのような言葉を發する政治家のくちびるの卑しさこそ最惡のものなのだ。

原爆病院の資料陳列室わきのひとつの部屋で、僕は重藤博士、金井中国新聞論説委員、「ひろしまの河」の小西信子さん、そして市内の個人病院の事務員として働く若い被爆者、村戸由子さんの四人のもととも広島的な人々、すなわち広島原爆をめぐって存在する諸問題を、もっとも本質的に代表する人々に、テレヴィのための討論をおこなっていただいた。僕は討論の司会の役をひきうけて、広島に来たのだった。

村戸さんをのぞいて、僕はすでにこれらの人たちにたびたびお会いしてきた。このノートの目的のひとつはこれらの人たちの生きる態度、ものの考え方を紹介することであつた。テレヴィのためにとつた短いフィルムは、これらの人たちの仕事のもっとも新しい発展をつたえるものとなつた。僕はこの討論の場に立ちあうことができたことを喜びとする。そして、また、新しく村戸さんという、屈伏しない被爆者の一典型の声に接することができたのをここに記録できることを幸運に思う。被爆したとき、村戸さんはほんの小さな子供だつた。ケロイドが村戸さんの顔を変えた。そこで成長した彼女の日々の希望は、過去の傷ついていない自分の顔を、見たいということであり、彼女自身の言葉を用いれば、《うしなわれた美》を回復したいということであつた。健康のためという